

ら、もしまたトラブルや困難に直面した時には、人々は再び「呪術師のところに行こう」と言うのだろう。たとえ、問題が解決した後

には「呪術師って、インチキだよな！」なんて、笑ってバカにしていたとしても。

同じかまの飯を食べて

片 山 祐美子*

「シンキロー」。ある日の昼下がり、朝の調査を終えて村の人たちとベンチに寝そべって昼食ができあがるのを待っていた私の耳に、聞き慣れた言葉が入ってきた。蜃気楼？何のことだろう。以下はそのシンキローにまつわるお話。

私の調査地は、西アフリカのガンビアという小国にある。「調査地はどこ？」と聞かれ、「ガンビアです」と答えると、必ずといっていいほど「あー、ザンビアね」という答えが返ってくる。そんな、あまり広く認知されていないこの国は、国土の西約80 kmを大西洋に面しているのを除けば、セネガルにぐると三方を囲まれて東西に細長い。くにゃくにゃと蛇行し、ミミズのような格好をしている。東から大西洋に向かって流れるガンビア川に沿って国境が走っているせいである。この奇妙な形が、ときに、ガンビアを「セネガルの横っ腹につきたてたナイフ」、「セネガル・パンにはさんだガンビア・ホットドッグ」などと形容させる。

調査のために約1年を過ごしたバンタント

村はガンビア川の中流域にある。ガンビア川に生息する豊富な魚たちを利用して暮らす漁撈民が生活しているのかと思いきや、そこにはマンディンカと呼ばれる農耕民が暮らしていた（写真1）。

彼らは雨季にコメや雑穀といった主食作物を栽培して暮らしている。女性は村から1 kmほど離れた水田でイネを育て、乾季には小さな井戸をたくさん掘った畑で毎日水やりをしながら野菜を栽培し、労働に励んでい



写真1 村の風景

密集する家の周りに雑穀畑が広がっている。電線がみられるが村に電気はない。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

る。一方、乾季には村内で一日中ごろごろしている男性も、6月から始まる雨季には朝食もとらずに畑へ働きに出る。

バンタント村は、大小さまざまな59のコンパウンドからなる。数軒からときには20軒を超える住居が長方形に並び、その外周にはトウジンビエの茎で作られた柵が立っている。このトウジンビエの茎で囲まれた敷地がコンパウンドである。

私の家は、サナファンタクンダと呼ばれるコンパウンドにあった。コンパウンドは、父系親族を基礎としており、名字にクンダをつけた名前と呼ばれる。このコンパウンドはファーティー姓であったが、バンタント村にはファーティー姓のコンパウンドが30以上もあるため、ファーティークンダという呼称は使われず、うちのコンパウンドは初代コンパウンド長の名前を用いてサナファンタクンダと呼ばれていた。私は村入りした日に、村の長老から現地名をいただいた。ファトゥマタ・ファーティー。夫婦の間に生まれた第一子が女の子であった場合、その女兒の正式名称は必ずこれである。そのため、バンタント村には数え切れないほどの同姓同名がいた。私はこの名前のおかげで、ガンビア滞在中には本当に多くの人に助けられた。

バンタント村での4ヵ月間の調査の後、私は広域調査に出かけた。ガンビアの地図を広げ、「今日はこの辺に行こう」と目星をつけ、その村に向かう長距離バスを探す。バスを見つけて乗り込もうとすると、背中に背負った少し大きめの荷物はバスの上に載せろと言われて、法外な料金を請求される。現地の人も同

様に高い料金を吹っかけられてはいるが、白人扱いされたと感じ、おもしろくない私は鬼のように料金を値切っていく。同じバスに乗り合わせたガンビア人が払っている額より安く済ませてしまったこともあれば、値切りきれなかった経験ももちろんある。交渉を終えてやっとバスに乗り込む(写真2)。

バスは5人座りの座席が4列、正面を向いて並んでおり、うしろのドア近くには窓に沿って4人がけの椅子が両脇に並んでいる。車内は狭く、お尻の大きな女性が進んできたときには誰かのお尻が浮いてしまうことになる。うしろのドア付近に席を確保した私は、走り出した車内で両脚を踏ん張っていた。椅子の奥行きが狭いため、油断していると滑り落ちるのだ。ゆれる車内で窓に頭がぶつからないように椅子の端を握ったり、斜め前を向いて座ってみたりと創意工夫していた私に、隣り合わせた青年が声をかけてくる。「名前は？」英語だ。村では完全に現地名の愛称、ファートゥ・ファーティーで呼ばれていた私は、考えもなく「ファートゥ・ファーティー」と答えていた。私のことをただの観



写真2 長距離バス

光客だと思っていた彼と周りの乗客は面食らう。彼は「ファーティーは敬虔なムスリムだ。素晴らしい」とマンディンカ語で言った。「ありがとう」と気分よく返事をした私に、私の向かいに座っていたスーツを着た大柄な男性が言った。「ファーティー！？あんな名字は捨てて、今すぐマーネ姓を名乗るんだ。」彼はさらに続ける。「ファーティークンダの奴らは仕事もせずに毎日食っちゃ寝、食っちゃ寝。腹を見ても。ぽっこり出ていて醜いったらないよ。」おなかの前で手を組み、大きいおなかをジェスチャーで示してくる。「そのおなかで言うか？」ぽっこりと出た彼のおなかに視線を向けながらも、その言葉は飲み込んでおいた。その代わりにこう返した。「マーネクンダのあなたたちだって仕事もせずに、こうやって人の悪口言っているだけでしょ。あんたたちの仕事は毎日木陰に座っておしゃべりすることなんだって？」ファーティーとマーネは初対面であっても、このようにしばしば相手の姓を貶し合う関係にある。決して仲が悪いわけではない。バスに乗り合わせた周りの人たちも笑い出す。

「どこから来たの？」次の質問がきた。私は「バンタント村」と答える。誰も「日本」という返事を期待してはいない。ガンビアの小ささがここで役に立つ。私がこれまで言葉を交わしたガンビア人の半数はバンタント村を知っていた。バスの正面を向いて座っていた青年が首をこちらに向けて質問を続ける。「どこのコンパウンドに住んでるの？アリカロ（村長）クンダ？」「いや、サナファンタクンダっていうところ。」「知ってるよ。コン

パウンドのボスの名前はイラーマンだろ？」「何で知ってるの？」「あのコンパウンドには俺の母親がいるんだ」「誰？」「タコっていう背の高い女性だよ。知ってる？」彼の実の母親の実父と継母の子どものひとりがタコだった。彼は一時、学校に通うためにバンタント村に住んでいたと言い、タコの子どもと寝食をともにしていた頃の話をしてくれた。「蟹気楼」という単語が耳に入ってきた。マンディンカ語をそれほど理解できていなかった私は、とりあえず彼の話の腰を折るまいと話の続きに耳を傾けた。タコの息子は私にとっては父親だ。「どこへ行こうとしているの？」と尋ねられ、広域調査のためにある村を訪れようとしていることを説明すると、その村の近くに彼の友人がいるという。私は目的地を急遽変更し、その友人のコンパウンド名と名前をフィールドノートにメモした。青年が教えてくれた村を訪れ、彼の娘として迎えられた。村を離れるときには調査に適した次の村を紹介してもらった。広域調査を終えて、20日ぶりに村に帰る頃には、「～さんによろしく」という伝言は10を優に超えていた。「ファートゥが帰って来たー」と猛ダッシュで迫り来る大群に迎えられ、村での調査に戻った。

私の暮らしたサナファンタクンダは、大人26人、子ども36人、総勢62人の大所帯である。伝統的な円形の藁葺き屋根の建物が10軒、横に長いトタン屋根の長方形型の家が3軒、敷地内に所狭しと並んでいる。

すべての家の入口付近には数人が寝ることのできるサイズのベンチが置かれている。さ

らに、コンパウンドの中心には10人ほどが寝そべることのできる大きなベンチが2つ鎮座している。ひとつはケーキンダー、もうひとつはムスクンダーと呼ばれ、ケーキンダーは主に男性が、ムスクンダーは主に女性が集まる。たいてい賑わっているのはムスクンダーの方である。朝の農作業から帰ってきた女性を中心に、昼下がりには多くの人が集まってくる。寝ている者、昼食の調理をしながら休んでいる者、娘の髪を編んでいる者、おしゃべりをしている者など、みんなおのこの時間を楽しんでいる。私はここで「蜆気楼」を再び耳にする（写真3）。

ムスクンダーのそばにあるベンチから、それは聞こえてきた。そこでは、30分ほど前から5人の男性がアタヤを飲みながら談笑していた。アタヤは、手のひらに載るほどの急須で中国緑茶を沸かしたものに大量の砂糖を入れた飲み物だ。専用の小さなグラスに注がれたアタヤを飲み干し、新たに注がれたアタヤをほかの誰かが飲む。このように数人で回

し飲みしていく。一巡目のアタヤがなくなっても同じ葉であと2回は沸かす。1時間以上に及ぶ至福の時だ。近くに座っていると、私にもそのグラスが差し出され、砂糖の味しかない飲み物をいかに気を悪くさせずに断るか、いつも思案していた。

私は隣で寝転んでいた女性に「蜆気楼って何？」と聞いてみた。彼女は、マンディンカ語で話し始めた。彼女は、眉間にしわを寄せて彼女の言葉に耳を傾けていた私を昼食の準備が行なわれている調理場へ導いた。トタンで囲まれた調理場では、2人の女性が昼食の準備に追われていた。米を炊いている鍋を支えている石を指差して、1・2・3と数えてみせ、そのセットがシンキローだと説明してくれた。「蜆気楼」とはかまどのことだったのかと合点した（写真4）。

その3日後、村長がコンパウンド長のもとにやってきた。コンパウンド長が「シンキローは3つだ」と言う。3つの石の話をして

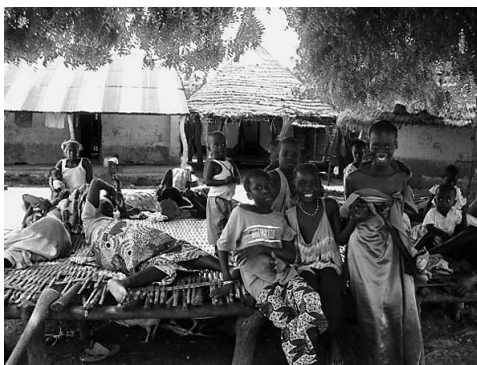


写真3 ムスクンダー

すぐ横に植えられたニームの樹が酷暑の昼下がりに涼を提供する。



写真4 蜆気楼という名のかまど

いるのかと思って耳をそばだてていると、村長が「シンキロー27」と言った。かまど用の石を27個にして何をするのかと疑問に思い、いつも根気よく物事を教えてくれる女性のところに聞きに行った。この村ではシンキロー、つまりかまど単位で物事を考えることがあり、村長は村のかまどの数を把握するためにコンパウンドを回っていることを教えてくれた。昔、このコンパウンドではひとつのかまどで炊いた飯をみんなで食べていたが、時がたち、人の数が増え3つのシンキローに分割されたこと、調理は同じかまどに属する既婚女性が交代で担当することなど、かまどに関するいろいろな話をしてくれた。私はこの日、「蜃気楼」に踏み込んだ。

いつも同じシンキローのみんなと食事をしている最中に誰かがそばを通りかかると、「一緒にどうぞ？」と声をかける。私も昼食時に村内を歩き回っているとよく声をかけられる。初めは遠慮しすぎてみんなに非難されていた私も、村生活ですっかり胃袋が大きくなり、気も大きくなり、遠慮しなくなっていた。ある日、いつも一緒に食事をする年配女性に呼ばれた。これからは、お呼ばれする相手をもう少し見極めた方がいいと言う。誘われてご飯と一緒に食べることはいいことだけれど、むやみやたらではいけない。私はもう、彼女と同じシンキローの一員であり、呼ばれた食事に手を出すのは、特に仲の良い友達や母親代わりの女性たちなどに限った方がいいとのことであった。もちろんそれ以外の誘いでもたまには受け入れ、いつも断ってばかりでもいけない、と。そんな微妙な匙加減

が私にできるだろうかと、この風習を煩わしく思った。

それ以来、シンキローの枠から外れた者同士で食事をする場面が気になり始めた。どんな関係の人なら一緒に食事をして問題ないのか。昼時に談笑していた青年や中年男性がそのまま昼食をともにする場面、一緒に農作業した者たち、グループ集会に参加した者、近隣の野菜畑で野菜の水やりをする少女たち、さまざまな場面でみられた（写真5）。

夕日の沈むころ、一足先に労働から解放された女性たちはベンチに座り、農作業を終えて家路につく人たちと挨拶を交わしたりしながら、夕食の合図を待っている。私はベンチに座って、野菜畑から収穫してきたサツマイモの葉を束ねていた。となり町の市場で翌朝販売するためだ。そんな私の横で、女性がバライロ（*Combretum micranthum*）と呼ばれる植物を煮出したものに砂糖をたっぷり加えた紅茶のような飲み物を1歳半の息子に飲ませている。3日前、彼女の息子は高さ80 cmほどのベッドから落ち、体調を崩していた。



写真5 労働を終えた女性たち
田植え作業を終えてグループで一緒に昼食を食べる。

口の周りはただれ、舌にはにきびのような白い点々が無数にあった。転落してから、母乳もほとんど受け付けず、食べ物も口にしていなかった。そこに、1歳9カ月のファトゥマタが泣きながら通り過ぎた。野菜畑で水やり仕事からなかなか帰ってこない母親に痺れを切らし、無謀にも畑に向かおうとしていた。おなかが減っているためか泣いている。泣きながらパタパタと小走りで駆けて行く彼女を、姉が連れ戻そうと追いかける。息子の

口をこじ開け、バライロ紅茶を流し込んでいたお母さんが2人を呼び止める。「息子がおっぱいを飲んでくれないから、お乳が張って痛くって。」姉がファトゥマタを抱き上げ、ベンチの上に座らせる。ファトゥマタは怪訝な顔ひとつせず、四つん這いになって異母の母乳を飲み始めた。彼女は左右の母乳を堪能し、満足そうに姉に連れられて帰って行った。シンキローを超えた共食の極みを見た気がした。

「気づき」がもたらすもの

—あるインドネシア人女性のエンパワーメントのはなし—

竹 安 裕 美*

インドネシア・南スラウェシ州のジェネボント県をはじめて訪れたのは2003年の7月のことだった。当時私は某独立行政法人の海外ボランティアとして北スマトラ州のとある村に赴任していた。村人の生活改善を目指すプログラム作りとその実施という、開発協力に従事する者には一見やりがいがあるように思えるが、その実、漠然とした目的の職務になっていた私は、当初の鼻息の荒さもどこへやら、なかなか思うようにいかない仕事の突破口を求めている。

そんな折、かつて日本での仕事を通して知り合いになっていた南スラウェシ州で活動するNGOのスタッフであるA氏とジャカルタ

で偶然再会した。久しぶりの再会に大喜びするとともに、内心忸怩たる近況を話しながら、私は南スラウェシでの活動を見学させてほしいと頼みこんだ。強引な私の申し出を受けて、A氏が連れていってくれたところがジェネボント県であり、そのとき紹介してくれたのがNさんという女性だった。

Nさんは当時30歳で、村の女性としては珍しく独身だった。北スマトラの村では30歳をこえた独身女性に出会うことがなく、心のどこかで寂しい思いをしていた私は、インドネシアではじめて出会った同年代の独身女性に親近感をもった。A氏とともに突然訪問した日本人の私を、彼女は快く迎えてくれた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科